

して、テキストを加工・充填していくのである。読み手の主体を尊ぶこのような読者論の視点を導入する時、文学教材は学習者の中ではじめて完全なものとなる、というテーゼが生まれる。そしてここに想像力を発揮させ、テキストを多義的に読ませるといふ指導の立場が公認されることになる。指導者は学習者の多義的な読みを組織するのである。

【参考文献】 飛田多喜雄『国語教育方法論史』（一九六五 明治図書出版）、浜本純逸・浜本宏子編『文学教材の実践・研究文献目録』（一九八二 溪水社）、浜本純逸・森田信義・東和男編『文学教育実践史事典』（一九八三 明治図書出版）（関口安義）

文体 ぶんたい 表現形式としての文章的特色を示すことばでスタイルともいう。作品のジャンルや作家によって文体はそれぞれ異なるが、小説や童話の文体は物語的世界を豊かにイメージできる文体かどうかによって読者への説得力に差が出てくる。童話の場合、子どもに理解できることばと表現でありながら、個人的で、読みやすく、リアリティーのある文体が要求される。文体は時代とともに変化していくが、作品の完成度を示す作者の顔でもある。（西本鶏介）

へ

ヘイエルダール Thor Heyerdahl 一九一四ーノルウェーの動物・人類学者。一九三七年マルキーズ諸島を訪れた際、ポリネシア民族の起源に興味を抱いた。四七年バルサ材の舟コンチキ号に仲間と乗り組み、ペルーから海流に乗ってポリネシアのトゥアモトウ諸島に漂着、民族移動の可能性を示唆した。この冒険は『コンチキ号漂流記』（一九四八）にまとめられた。ユニークな研究方法で広く知られる。著書にはほかに『アク・アク』（五七）、『葦舟ラー号航海記』（七〇）などがある。（木村由利子）

ヘイグII ブラウン Roderick Haig Brown 一九〇八ー七六 カナダの作家。英国サセックスに生まれ、一八歳でカナダに移住。カナダ児童文学の重要なジャンルでそれぞれ優れた作品を残して、カナダの児童文学を確立した一人。代表作は、大自然の冒険物語では、『Starbuck Valley Winter スターバック

ク・バレーの冬』(一九四三)とその続編、写実的動物物語としては、『*Ki-Yu* キー・ユー』(五四)がある。なおその他の作品として、歴史物語に、カナダの西海岸を舞台にした『*The Whale People* 鯨に生きる人々』(六二)がある。(桂 有子)

Peyton K. M. Kathleen M. Peyton 一九一九、イギリスの児童文学作家。美術学校在学中、同窓の学生とかけ落ち結婚、夫婦ともども絵筆をペンに換えて、生活費稼ぎをはじめ。『*Windfall* 難破船上の戦い』(一九六三)で作家としての評価を得た後は、次々に長編を発表し続け、代表作の三部作『愛の旅だち』(六七)、『雲のはて』(六九)、『めぐりくる夏』(六九)の後さらに一冊『愛ふたび』(八二)を加え、四部作になる。『フランバース屋敷の人びと』の第二巻で、カーネギー賞を受賞、作家の地位を揺るぎないものにした。 Peyton の作品の特徴は何よりも、ストーリー展開の面白さにある。主人公は初期にみられるような目的に向かって突進する行動型から、のちには内省的傾向をもった型へと多少の変化はみられるが、常に思春期の若者であることに変わりなく、人生の方向を求めて揺れ動く若者の姿に、馬、車、船、飛行機などを絡ませて、躍動感と臨場感を盛りあげて面白さを倍加し、読書の醍醐味を満喫させてくれる。(掛川恭子)

ペイリー キャロライン Carolyn Bailey 一八七五

一九六一 教員、ソーシャルワーカー、編集者、作家。ニューヨーク生まれ、ローマのモンテッソリー学校で教育を受けた。ペイリーの名を有名にしたのは『*ミス・ヒッコリーと森の仲間たち*』(一九四六)で、おもちゃの人形が文学的モチーフとして成功した例として高い評価を得、ニューベリー賞を受賞。手づくりの *Paiotia* にア精神にあふれた作家の資質は『*Pioneer Art in America*、*Paiotia*、パイオニア芸術』(四四)のなかにも見ることができ。(島 式子)

ヘイル キャサリン Kathleen Hale 一八九八、

イギリスの絵本作家。猫の一家の愉快な生活を描いた大型絵本『*ねこのオーランド*』(一九三八)は、リトグラフの技法を使った平板印刷の特色を生かした、イギリスでの最初の作品とされている。これにはじまる何冊ものオーランドものは、絵では第一作に及ばないが、ことば遊びの楽しさでは注目に値する。それ以外の代表作には『*Hennetta, the Faithful Hen* 誠実なメンドリ、ヘンリエッタ』(四三)、『*Hennetta's Magic Eggs* ヘンリエッタの魔法の卵』(七三)がある。(脇 明子)

ペーオウルフ Beowulf 古代イギリスの叙事詩。口

承の伝説が七世紀末から八世紀末までに今日の形に総括されたものと考えられる。作者不詳。第一部はデンマーク王の宮廷を悩ましていた食人鬼グレンデルとその母をスウェーデンの英雄ペーオウルフが退治する

話。第二部は王となって五〇年後ペーオウルフが火を吹く竜を退治し自分も死ぬまでを語る。北欧の異教的伝説の中の理想的勇士像がキリスト教善悪観の中で描かれている。

(猪熊葉子)

ベスコフ エルサ Elsa Beekow 一八七四—一九五二 スウェーデンの児童文学作家、絵本作家。工科専門学校を卒業した後、図工の教師として勤務した。結婚を機に、一八九七年『小さな小さなおばあさん』で絵本作家としてデビュー。一九〇一年『ブルーベリーの森でのピユッテの冒険』で、さらに『トムテポーの子供たち』(一九一〇)などの傑作を残し、広く親しまれるようになった。文章は簡潔で、散文詩のようであり、絵本では、明るく日常的な色彩豊かなイラストの中に、スウェーデンの太陽の恵みを物語る自然、四季の子どもの情景、小さな田舎町の田園詩の世界を、心温まる情感の込められた絵と文で描いているが、これらは世界中の子どもの心に共感を呼ぶものであり、今日世界にスウェーデン児童文学が知られる先駆を成した。五二年、ニルス・ホルゲルソン賞を受けている。さらに、『Blomster festen i tippan 花壇の花祭り』(一四)では自然への興味を北欧の植物界を通して描いている。

(柳沢重也)

ペスタロッチ ヨハン ハイインリヒ Johann Heinrich Pestalozzi 一七四六—一八二七 スイスの教育

家、教育学者。チューリヒに外科医の子として生まれる。カロリナ大学で哲学を学ぶうち、ルソーの『エミール』に深い感銘を受け、自ら貧民学校や孤児院を設立して教育事業に専念する。生活苦の中で書かれた教育小説『Lienhard und Gertrud リーンハルトとゲルトルート』(一七八一—八七)は、彼の教育思想を民衆に広める上で大きな役割を果たした。一九世紀のスイス児童文学にもその影響がみられる。

(田中安男)

ペーソス pathos 語源はギリシア語の pathos(苦悩、受難の意)。文学上では、作品に漂う哀感・哀愁のことで、作者が人間や人生を悲哀、哀憐、同情をもつてみつめる作家態度から生まれる。風刺や皮肉のような攻撃性を有していない。通常おかしさと混じり合い、へ涙を宿した笑いを生む。ファージョンの『イタリアののぞきめがね』、ヤンソンの『ムーミン谷の冬』、新美南吉の『和太郎さんと牛』などに豊かに漂っている。

(原 昌)

ペチシカ エドワルド Eduard Petiška 一九二四—八七 チェコスロバキアの作家、詩人。プラハのカレル大学哲学部にて一九四九年博士号を取得。四〇年代中ごろから児童雑誌などに作品を書きはじめ、その後数多くの童話や外国の神話、伝説の再話などを書いている。またチェコ作家同盟で児童文学の委員会に従事したり、児童本の出版社に協力するなど、作家以外の

活動もしていた。代表作では『りんごのき』(一九五四)、『もぐらとずぼん』(六〇)、『もぐらとじどろしや』(六三)などが日本でも非常な好評を博した。(保川垂矢子) <シセ> ヘルマン・Hermann Hesse 一八七〇—一九六二 二〇世紀のドイツの代表的小説家、詩人。宣教師の息子としてマウルプロンの神学校に通うが、厳格な教育に耐えきれず、早々に退学。機械工、書店店員などを経たのち、一九〇四年より作家として立つ。一九年モンタニョーラに移住、三三年スイスの市民権を獲得する。四九年ノーベル文学賞受賞。我が国やアメリカでは、ドイツ本国以上に愛読されている作家。ことに自然や青春の苦悩を描いた、みずみずしい抒情あふれる初期の作品『ペーター・カーメンツィント』(一九〇四)や『車輪の下』(〇六)、『春の嵐』(一〇)は、若い世代の強い共感を呼ぶ永遠の青春の書である。第一次世界大戦下の過労に家庭の不幸の心労が重なり、一時精神を病む。この体験から『デーミアン』(一九)が生まれ、これ以後の作品『シッタルタ』(二二)、『荒野の狼』(二七)などはひたすら内面への道をたどり、西洋思想から東洋思想へと傾倒していった。(川西美沙)

ベッテルハイム ブルーノ Bruno Bettelheim 一九二一—歿年不詳 心理学者、障害児教育家。ウィーン生まれ。文学、美術史、精神分析学を学び、フロイトの影響を受ける。一九三八年、ナチスに捕らえられ、

二年間、強制収容所に収容される。のち、アメリカに脱出、シカゴ大学の教育心理学教授となる。そのころから障害児教育に携わる。『昔話の魔力』(一九七六)で世界的に知られるようになった。(小澤俊夫)

別役 実 みづのり 一九三七—(昭12) 劇作家。

満州に生まれる。早稲田大学政経学部中退、学生劇団「自由舞台」へ入団、戯曲を書きはじめる。一九六七年『マツチ売りの少女』『赤い鳥の居る風景』で岸田戯曲賞を受賞。独特の暗喩と逆説、そして美しい詩的な言語によって現実の深い亀裂をのぞかせる戯曲作品を次々と発表。童話、児童劇でも独自の世界を展開させている。八五年、『ふしぎの国のアリス』の『帽子屋さんのお茶の会』で斎田喬戯曲賞を受けた。(しかたしん)

ペテルソン ハンス Hans Peterson 一九二二—スウェーデンの作家。義務教育終了後、すぐに就職、電気工として働いていたが失業した。生来文章を書くことが好きで、この機会を利用して物語を書きはじめる。デビュー作『*Stina och Lars på vandring*』や『*ラストティーナとラルス*』(一九四五)が児童図書賞を受賞し、これに力を得て、本格的に書きはじめた。一九四七年には大人向けの小説集も出版、一時は大人向けの作家をめざすが、五五年に『*Det kallas kärlek*』これこそ愛』がはじめて外国語に訳され、また『*Magnus och ekorrungen*』マグヌスと子リス』(五六)がドイツの児童

図書賞を受けたのをきっかけに、自分が児童書向け作家であると悟る。以後は子ども向け作品に力を入れ、趣味として普通小説を書く。『Magnus, Mattias, och Mari』、マグヌスとマチアスとマリ』(五七)、『ニルス・ホルゲルソン賞を、七一年にアストリット・リンドグレン賞を受賞した。絵本、ジュニア小説、評論、翻訳、戯曲と、活動は幅広い。一〇〇冊あまりの著書をもつ、現代のスウェーデンで最も精力的な作家である。

(木村由利子)

ペトリーニ Enzo Petri 一九一六

イタリアの児童文学者。シエナで生まれ、大学の文学部を出て、高校教師、新聞や雑誌の編集者を務めたのち、一九四六年に、戦争中の反ファシズム運動に取材した『緑のほのお少年団』で児童文学の活動に入った。こうした少年向きのフィクションのほかにも、『San Francesco d' Assisi アッシジの聖フランチェスコ』(一九六〇)などの伝記や、幼年向きの童話もあり、また児童文学評論でも活躍し、『Avviamento critico alla letteratura giovanile 児童文学への批判的アプローチ』(五八)などの著作もある。

(安藤美紀夫)

ペトレスク チェザル Cezar Petrescu 一八九二

一九六一 ルーマニアの小説家、ジャーナリスト。国の東部モルドヴァ地方の農村に生まれ、首都ブクレシュティの大学を卒業後、ジャーナリストとして活躍

した。そのかたわら、社会全体の姿を描くことをめざして、バルザック流の連作小説を発表。児童文学の作家としては、動物の目から人間社会を見る形式の『Fram, ursul polar 白熊フラム』(一九三二)や豊かな抒情性にあふれる『Omni de zapad 雪だるま』(四五)などによって多くの読者を得た。

(直野 敦)

ベヒシュタイン ルートヴィヒ Ludwig Bechstein

一八〇一—一六〇 ドイツの作家。高名な植物学者であった叔父の世話で、薬学を学ぶが、二七歳の時発表した詩集が、領主の目に留まり、ライプチヒとミュンヘンで、歴史、哲学、文学を学ぶ機会を与えられる。二二歳の時すでに、『Thüringische Volksmärchen チューリンゲンの昔話集』を刊行しているほど、ドイツの古代・中世に興味をもっていた。大公によって図書館員に任ぜられてからも、古代研究と口承文芸の発掘、再話に努めた。*グリム兄弟と同時代に昔話や伝説を発表したのだが、昔話の再話の方法は異なり、グリムよりはるかに豪華な物語にしている。

(小澤俊夫)

ベメルマンズ ルートヴィヒ Ludwig Bemel-

mans 一八九八—一九六二 アメリカの絵本作家、イラストレーター。児童書、絵本、成人書のイラスト類を描いたが、広く知られるようになったのは、マドレーヌを主人公とした絵本シリーズである。おてんばな女の子、マドレーヌのやんちゃぶりが、豊かな色彩と動

きにあふれて、イラストによって一段と効果をあげている。第二作『マドレーヌといぬ』(一九五三)は、一九五四年度のコールテコット賞受賞。

(金平聖之助)

ヘリング アン Ann Herring

どもの世界だけを描いて満足するベルカン風は今世紀まで命脈を保ち続けた。

(新倉朗子)

ベルゲングリユーン ヴェルナー Werner Berggruen 一八九二—一九六二 ドイツの小説家、抒情詩人、ロシア文学の翻訳者。大学に学んだ後、第一次大戦に参加。戦後は雑誌の編集者で寄稿家。カトリックに改宗(一九三〇)しカトリック・ヒューマニズムの立場に立ち、写実的な描写をしながら想像的なもの、神秘的なものに迫る。作家は神の啓示を伝えるべきものと考え。『Herzog Karl der Kahne カルル大豪胆王』(三三)や『Der Grogbran und das Gericht 大暴君と審判』(三五)などの時代批判の歴史小説を書いたためにナチスに追われて一時スイスに逃れる。自分の子どものために書いた『ツィーゼルちゃん』(三三)は、高学年のための『Die drei Falken 三羽の鷹』(三三)や『Der Spanische Rosenstock スペインのばら』(四一)などの短編小説、数々の抒情詩とともにドイツの教科書にも入っている。

(植田敏郎)

ペルゴー ルイ Louis Pergaud 一八八二—一九一

ヘルコー
ペール・カストール → フォシエ、ポール
ベルカン アルノー Arnaud Berguin 一七四七—
一八一 フランスの教育家、ジャーナリスト、作家。月刊誌の形式を取り単独で書き下ろした『L'Ami des enfants 子どもの友』(一七八二—八三)を発刊、好評を博しイギリス、ドイツでも翻訳された。ルソーの教育論の影響と一八世紀末の感傷主義がその特色であるが、同時代のほかの作家と比べると、自然な文体への努力が明らかに認められる。現実の社会と切り離れたへ子

て一二年『ポタン戦争』を刊。第一次大戦で戦死。三年の生涯だった。『ポタン戦争』は、児童文学作品ともいえる小説で、フランスの農村の子どもたちの、ポタンをむしり取り合う戦争ごっこを描いたもので、作者のわんぱく時代の回想と郷里の自然が重なり合って生まれた作品。

(塚原亮一)

ヘルシング レンナルト Lemart P. Helsing 一九

一九、スウェーデンの詩人、作家。ナンセンス詩集

『*Katten blåser i silverhorn* ネコが銀の角笛を吹く』

(一九四五)で児童詩界にデビュー。リズム感あふれる詩は、スウェーデン児童文学に新風を吹き込んだ。多くの画家と組み、たとえば『かぼちゃひこうせんぶつくら』(七五)のように楽しい世界をつくりあげた。

『*Tanken om barnlitteraturen* 児童文学考』(六三)では児童文学を論じ、奥の深さをみせている。

(木村由利子)

ヘルトリング ペーター Peter Hartling 一九三三

西ドイツの作家、詩人。新聞記者や雑誌の編集者を経て独立。児童書は一九七〇年から書きはじめた。作品の数は少ない。『ヒルベルという子がいた』(一九七三)では障害児を、『おばあちゃん』(七五)では交通遺児になった少年と貧しい祖母の二人暮らしを、『ヨーンじいちゃん』(八一)では老年や死を、という具合に、一貫して現実に目をすえ続けている。しかし、それらはい

わゆる社会問題として取りあげるのではなく、そういう現実にあつて一層くつきりと浮かびあがる人間の真実の姿をそのまま取り出そうとしている。その意味で、六〇年代に西ドイツで数多く出たリアリズムの作品とは一線を画している。省略の効いた文体や語法も独特で、それが、作者の現実をみつめるユーモアとペーソスのない交ざった目を、おのずから際立たせている。

(上田真而子)

ベルナ ポール Paul Berna 一九〇八、フランス

の児童文学作家。若い時から種々の職業につき、苦勞しながら文学修業をした。『*La port des étoiles* 星の門』(一九五四)というSF作品で作家として出発、『首なし馬』(五五)によって少年文学コンクール大賞を受け、作家としての地位を確立した。『首なし馬』はフランスの地方都市の場末に住む貧しい少年少女たちが、悪人が財宝を隠した首のない木馬で遊んでいるうちに、悪人たちの犯罪を暴くという推理サスペンス仕立ての作品。ここには、少年少女たちの賢さ、創意、強さ、勇気、実行力が活写されていて、現代フランス児童文学の傑作の一つに数えられる。以来、ベルナは、『尾行された少年たち』(五六)、『辻音楽師』(五六)、『オルリー空港22時30分』(五七)、『*L'épave de la Béatrice* ベレニス号の漂流』(六九)、『*Le témoignage du chat noir* 黒猫の証言』(六三)など、いずれも少年少女

の活躍する推理小説を書き、国際アンデルセン賞、フランス児童文学大賞などを受賞した。(神原晃三)

ペロー シャルル Charles Perrault 一六二八—一七〇三 フランスの詩人、批評家、童話作家。「碑文・文芸アカデミー」の書記を振り出しに王属建築総監となり財務長官コルベールの片腕として約二〇年間多忙な官職にあった。アカデミーで朗読した自作の詩『Le siècle de Louis le Grand ルイ大王の世紀』(一六八七)でルイ一四世の時代を褒めたたえ、古代人と近代人の優劣を論じる文学史上名高い「新旧論争」のきっかけをつくった。近代派としての論点を展開した『Parallèles des Anciens et des Modernes 古人近人比較論』(一八八—九七)の刊行は、『童話集』執筆の時期と重なる。民間に伝わる昔話を直接、間接の材源とした『童話集』は、子ども期の独自性が発見されず子どもの文化が成立していない時代であって、子どもを意識して書かれた最初の児童文学であり、三〇〇年の間世界中の子ども部屋の財産として生き続けてきた。一七世紀末には宮廷を中心にあちこちのサロンで新しい文学ジャンル「仙女物語」が流行したがあくまでも大人の楽しみに書かれたものであった。『童話集』中の『韻文による物語』(九五)はこうしたサロンで朗読により披露されたのち、『グリゼリデイス』(九一)、『愚かな願いごと』(九三)、『ろばの皮』(九四)と一編ずつ出版された。合本の

「序文」(九五)でペローは、「先祖が子どもたちのために作った昔話」の真実を「幼い年齢にふさわしい楽しい話に包んで」飲み込ませるのはいいことではないかと子どもを意識した執筆の姿勢を明らかにしている。

以後、ペローのお話はわかりやすい散文で書かれることになる。大人の読者への目配りは、お話ごとに教訓で結ぶという配慮となった。『童話集』の散文による物語は、『眠れる森の美女』『赤ずきん』『青ひげ』『長靴をはいた猫』『仙女たち』『サンドリヨン』『まき毛のりけ』『親指小僧』の八編で、『過ぎし昔の物語ならびに教訓』(九七)と題し作者名なしに出版された。口絵の文字板に「がちょうおばさんの話」とあり、手稿本(九五)はこれを題名としていた。当時口伝えの話は「老婆の話」「がちょうおばさんの話」「ろばの皮の話」などと呼ばれた。英訳に際しこの文字板が「マザーグースの話」と訳され、これが、英語に「マザーグースの名の現れるヒントとなった。流行の「仙女物語」に比べるとペローの童話ははるかに簡潔で子どもたちにも親しみやすい。口伝えの楽しくリズムカルな語り口は、「アン、アン姉さん、何か来るのが見えなくて？」のように、すぐに口ずさまれる調子のいい文句の繰り返しによって伝えられている。直接的な表現を用いた、話しことばに近い文体は『童話集』の大きな魅力である。ペルサイユの宮廷文化をはじめ同時代の現実を反映させた

写実主義や、デカルトの国の合理的な想像力の特性といった再話ぶりがよく指摘されるが、無駄のない文章の魅力と、昔話のテーマやモチーフなどの基本構造を忠実に伝えていることが、今日まで読み継がれる最大の理由であろう。

「眠れる森の美女」^{のむねるもり} *La Belle au bois dormant* 口承昔話による童話。手稿本(一六九五)、雑誌初出(九六)、初版(九七)。長い間子どもがなかった王と王妃に女の子が生まれる。祝いの宴に招待されなかった仙女が怒り、王女は一五歳で紡錘に刺されて死ぬ、と呪いをかける。別の仙女が一〇〇年の眠りにつく、と呪いを修正する。一〇〇年目、一人の王子が現れ王女の眠りを覚まし結婚。暁姫と日の王子が生まれる。王子の母は人食いで、孫と嫁を食べようとするが失敗。恐ろしい桶に飛び込んで死ぬ。
(新倉明子)

ヘンツ ゼリーナ Selina Chözn 一九一〇ー スイスの作家。チューリヒでモンテッソーリ教育に携わった後、結婚して故郷へ戻り、スイスの風俗や郷土愛を、子どもの世界を通じて表現した。*カリジェが絵を描いた絵本『ウルスリのすず』(一九四五)、『フルリーナと山の鳥』(五二)、『大雪』(五五)などの作者として、世界的に知られるようになる。物語はリアリスティックだが、スイスの牧歌的な雰囲気をよく伝えている。

(佐々木田鶴子)

ヘンティ ジョージ アルフレッド George Alfred Henry 一八三二―一九〇二 イギリスの児童文学作家。従軍記者としてクリミア戦争、イタリア独立戦争などを報道したあと、『*Out on the Pampas*』^{パンパス}に出て(一八七二)を書いて児童文学作家になる。その主人公の少年たちは、明るく、たくましく、勇敢で、信仰があつといった当時の大英帝国の理想像として描かれた。おびただしい歴史冒険小説を書き、作品は類型的だが、その与えた影響は大きかった。
(犬飼和雄)

ヘントフ ナット Nat Hentoff 一九二五― アメリカの作家、プロデューサー、アナウンサー、編集者、コラムニスト。ボストンに生まれ、ノースイースタン大学を卒業。フルブライト奨学生として、ソルボンヌ大学にも学ぶ。一九六五年、はじめて一〇代の子どものための小説『ジャズ・カントリー』を発表。ジャズに魅せられながら、白い肌ゆえにジャズの世界から拒否され、それでもなおその世界の一員となろうとしてあがき続ける少年を描いて、一〇代の若者だけでなく、多くの大人たちの感動を呼んだ。続く『ペしゃんこにされたってへこたれないぞ』(一九六八)ではベトナム戦争のさなか、国家権力と市民の自由を求める権利とはさまに立って苦悩する若者たちの姿を描いて、これまたその世代の人々の共感を呼び、以後も一貫して、若者たちの側に立ち、その内部に入り込んで

の発言を続けてきている。最近作に『The Day They Came to Arrest the Book』の本は危険だ』（八二）。ほかにジャズに関する多くの編著書がある。

（清水真砂子）

ホ

賀 宜^{イハ} 一九一四、中国の児童文学作家。本名は朱緑園。江蘇省の没落地主の家に生まれる。孤独な子ども時代、読書にふけた経験が、のちに児童文学の道を歩ませることになる。小学校の教員をしたのち、一九三四年から創作を開始。三五年には文芸雑誌「先生」の主編となる。翌年、最初の童話集『小草』を自費出版する。これは旧社会に対する不満と新しい社会へのあこがれを描いたもので、当時多くの小学校教員に支持された。その後「中国少年報」の副編集長などを経て、現在、少年児童出版社副社長、中国作家協会児童文学委員会副主任。作品集には三四年からの創作を収め、第二次全国少年児童文芸創作栄誉賞を受

けた『賀宜作品選』（八〇）や、社会主義革命を進める中で犠牲になった一少年の英雄的な行動を描いた『嘉陵江の水は青く』（六五）、美しいファンタジーの『小さなメノウ』（六三）などがある。

（君島久子）

冒険小説^{ぼうけんしやう} 作中人物がさまざまな事件や障害に遭遇し、それら乗り越えていく起伏ある姿や振舞いにつきまとう雰囲気や冒険だとすると、およそ子どもための物語はすべて冒険小説だといってよいだろう。子どもの興味や関心を喚起し持続させる物語には、一定の冒険性は欠かせないからである。したがって歴史小説、探偵小説、SFなども冒険小説の枠内で考えることができるし、『アリス』や『トールキン』、C・S・ルイスなどの空想的な作品群も冒険性という点からみると、この枠内で捉えられないこともない。ただ、事件の連続と人物の動きに力点がおかれ、そしてその要素こそが読者の想像力を喚起する作品もないわけではない。狭義でいう冒険小説とはその種の作品群で、たとえばイギリスでは、バニヤンの『天路歷程』（二六七―八四）がその発端だろう。作品の意図は別にして、ここにみられる冒険性は『ロビンソン・クルーソー』（二七一九）や『ガリヴァー旅行記』（二二六）、アメリカの『皮脚絆物語』、ヴェルヌの作品群にも共通し、これら大人向けの物語が子ども向けの冒険小説の型をつくり出したといっただろう。マリヤットを筆頭とする